「菜穂子」の生

—堀辰雄とリルケ関連フランス語文献—

飯　島　　洋

I

「菜穂子」（1941 年 3 月「中央公論」同年 11 月　創元社『菜穂子』）の読解は、主人公菜穂子と夫圭介との間に夫婦愛は成立しうるかという観点で論じられてきた。「絶望視されてゐた荒地から真の夫婦愛の誕生。貧しけれども匂なけれども、誇らかに美し。—このあたりより Rembrandt-Ray を与へよ。」という、菜穂子が夫との生活に愛の可能性を見出す「創作ノート」の構想が達成されたのかを主眼とし、菜穂子の幸・不幸に夫の存在が大きな役割を担っていることを前提としている。

自分が選択した結婚生活の中で、最後の賭けに破れて悲劇の淵に立ちつくす

（谷田昌平　「堀辰雄　その生涯と文学」　1955・12　青木書店）

世俗の世界に生を賭けようとして傷つく悲劇的人物として設定されていて、そこに愛の成立の可能性は、まったくありえない

（松原勉「堀辰雄『菜穂子』を読む（下）」
宮城学院女子大学研究論文集　1994・12）

何とか「圭介」と並んで歩こうとしているかに見える。ただ、まだ「菜穂子」は黒川家にたどりついてはいない。けれども、肉体を取り戻した「菜穂子」は、今後新たな人間関係を築いていくことが容易に想像されるのである。…療養所のような〈特殊〉な場所ではなく、〈普通〉の場所で、「普通の人々」の中でこそ生きていくべきであると、宣言している作品なので

ある。

（西原千博「堀辰雄試解」　2000・10　蒼丘書林）

今後の菜穂子の人生がどのようなものになるかは分からない。だが、絵画＝ロマネスクな世界を脱出して、食堂＝現実・世俗へ向かう菜穂子のなかに、現実・世俗において食べる＝生きる意志・力が明確に芽生え始めていたことは明らかではないか。

（渡部麻実「流動するテキスト　堀辰雄」　2008・11　翰林書房）

しかし、菜穂子の人生はそれほど夫婦関係に依拠するものなのか。「ノート」は菜穂子本文の言語の注釈となるものは採り、読解のための参照とするべきだが、「ノート」を本来の姿として其処への復元を目指すかのような読みは正しいといえるのか。夫婦愛が成立すれば菜穂子は幸福であり、成立しなければ不幸という前提での読みは、実現したテクストよりもノートの原構想を重視している。また、西原・渡辺両氏は世俗への帰還を重視しているが、サナトリウムと対照される生を世俗での普通の暮らしと一概に考えてよいのか。

堀辰雄は「風立ちぬ」執筆前後からドイツ語詩人ライナー・マリア・リルケ Rainer Maria Rilke に親しみ、フランス語によるリルケ論を相当読み込んでその理解を深めている。渡部麻美氏の調査に拠れば[1]、1937 年頃から J.F.Angelloz の « Rainer Maria Rilke l'évolution spirituelle du poète »（Paul Hartmann Éditeur,1936）、同じく Angelloz による、リルケの代表作「ドゥイノ悲歌」の訳注 « les Élégie de Duino »（P.Hartmann 1936）、Robert Pitrou の « Rainer Maria Rilke Les thèmes principaux de son œuvre »（Albin Michel,1938）[2] を研究している。論者は嘗て、堀の「かげろふの日記」について、「愛する女性」を讃える「マルテの手記」を中心としたリルケの影響からの逸脱を論じたが[3]、「マルテの手記」以降リルケ自身も大きく思想を展開させている。右に掲げた著作は晩年の大作「ドゥイノ悲歌」を軸に、変容後のリルケの思想について詳細に追究している。

こうした戦前のフランス語によるリルケ論には、伝記的部分の抄訳が雑誌に収載された他には邦訳が存在せず、堀の作品研究においては全く手付かずにされてきた。しかし堀が親しんだリルケ的思想が作品世界にどのようなかかわりを持つかについて考えることは不可欠であろう。特に、リルケ論の研究を深め

てからの作品である、凡庸な男性との結婚生活に苦悩する女性の生を描いた「菜穂子」において、それは極めて重要であると思われる。

本稿では、「菜穂子」本文の言葉、表現が担う意味を厳密に検証したうえで、堀が親しんだリルケ論との関係を精査し、「菜穂子」論の新たな地平を開きたい。

II

「菜穂子」本編には結婚後の菜穂子が描かれているが、その前編として加えられた「楡の家」があり、結婚前の菜穂子と母の相克、結婚を決意する精神的基盤が明らかにされている。

「楡の家」という題名については中島昭氏が、「物語の女」を改作するに当たり作品の舞台に登場する三村家の家の木が楡とされたことに、リルケの発想が投影されていると見る[4]。その根拠として「或外国の公園で」（「知性」一九四〇・六）の記述が挙げられている。「生と死との間を彷徨してゐる」家を象徴的に表そうとしたものと氏は指摘しているが、それにしても家が彷徨するというのは曖昧な表現であることは否めない。

> お前は、湿つた、薄暗い、そして誰も近づかうとはしない、お前の楡の木陰に、何故これが全くはじめてのやうに、そのやうに期待に充ちて、いつまでもぐづぐづして居るのだ？そしてお前は何にそそのかされたればとて、それと反対なものを、日の当たつた花壇の中に、まるで薔薇の木の名前でも捜すやうに、捜してゐるのだ？…その墓を前にしながら、詩人はしかしこんな事をしてゐるのはそれがはじめてでもあるかのやうに、いかにも期待に充ちながら、いつまでも愚図々々してゐる。彼は、いま自分の感じてゐる死と反対ものを求めるかのやうに、日の当つた花壇の中に、何物かを捜してゐるのである。…死の考へが生きんとする欲望を暗くしてゐるやうな、まだいくぶん感傷的な青年の姿には、しかし充分に後の日のマルテの悲痛なる姿を彷彿せしめるものがある。

これは J.F Angelloz による « Rainer Maria Rilke l'évolution spirituelle du poète » 中、リルケの詩 In einem fremden Park（「外国の公園で」）の解説部分(p.217)に

基づいている。

il hésitera, plein d'attente, en ce lieu où nul ne vient ; il cherchera, comme opposition à cette mort, quelque chose dans les parterres ensoleillés ... Le parc n'est plus qu'un décor, l'occasion d'une découverte essentielle, le cadre dans lequel s'inscrit l'opposition entre la vie et la mort, car l'idée de la mort obscurcit le désir de la vie, et le poète, ou plutôt son autre lui-même, n'a pas encore trouvé la conciliation des deux contraires.

彼は期待に満ちて、何もやってこないこの場所で躊躇うであろう。彼は日に照らされた地上に、死と反対のものとしての何かを探すであろう。…公園はある装飾、本質的なものの発見の機会、生と死の対立が刻まれる額縁以外の何物でもない。というのは、死の考えが生を暗くし、詩人、あるいはもう一人の自分自身は、この二つの反対物の和解を見出していないのである。

堀の随筆は、死を思うことが生への欲望を抑圧しているなどといったこの論の解釈をよりどころにしている。死はここでは生を暗くするものとして否定的に捉えられている。死の気配が漂う楡の木陰から、人物は躊躇いを感じつつも、生の方向へ向けて抜け出ようとしている。生と死という反対物の和解が見出されていないという典拠の記述も併せ考えるならば、「楡の家」という題名は、三村家を「死の考へ」に支配されたものとして否定的にみた視点に根ざしていると考えられる。「生の不安に怯やかされてゐる」三村夫人を中心とするこの家に、菜穂子は生と相反するものを感じたのではないか。

この「生の不安」の具体的な様相について検討しておこう。「菜穂子」には、彼女の心性が

本能的に夢を見ようとする少年と、反対にそれから目醒めようとする少女

（「菜穂子」　「二」）

というように示されている。これは堀の遺した文章にある

みかけは異ふが、あの母と同質の、悲劇—いはば生の根源に向はうとする無邪気な心の傾きをそのまま、血気のあまりそれによくふみこたへた母

の抵抗ももたなければ

（「菜穂子覚書　創作メモ」1940・1・15　帝国大学新聞）

母と子と異つて、もつと現実的な生きかたをしようとしつつ、自己のうちに潜む母と同じやうなロマネスクな気もちに苦しめられだすやうな一人の若い女を描かうと思つたのである。

（鎌倉文庫版『菜穂子』あとがき　1946・10）

という構想を踏まえている。菜穂子は夢を抱いていることを自覚した上でそれを否定しようとし、「夢」から醒めようとする。作家・森於菟彦からの婉曲的な求愛に苦しんだ母のような「不安な生」を拒否して平凡な結婚に身を落ち着けようとした。森が恋愛を成就し得ず、北京で孤独に客死したことを菜穂子は知っている。しかし「ロマネスク」な心性を捨象することはできなかった。菜穂子が平凡な生の枠組みから逸脱する心性を持っていることが明らかにされている。

ところで Angelloz によれば、この段階では対立関係におかれた生と死の和解は別の詩において主題となる。Angelloz はリルケの思想の展開を明らかにするものとして In einem fremden Park に続けて der Apfelgarten（「林檎園」）を取り上げる。

Nous devrons être, dans toute une longue vie, ceux qui ne veulent qu'une chose et grandissent en silence pour la servir....Dès le livre des images, une conception nouvelle apparaît, hesitante, incertaine ; elle se precise lorsque Rilke, découvrant le sens de la mort, se prépare à adopter la vie

われわれは長い人生において、一つのものだけを望み、そのために沈黙のうちに偉大になる者であらねばならない。…「形象詩集」以来、一つの概念が躊躇いがちに不確かに現れる。それはリルケが死の意味を見出し、生を受け入れる準備ができた時に明確になる。

真の人生を受け入れる態度は、死に裏打ちされることによって生に価値がもたらされることの理解に基づくことが示されている。

死を否定的なものと捉えない姿勢は、Angelloz による Les Élégie de Duino 解説に述べられている。

Les Élégies doivent précisément demontrer que la vie est possible, en lui

ajoutant la mort qui est son achèvement, en l'enrichissant de la mort qui la complète et lui confère sa totalité.

(Avant Propos)

「悲歌」はまさに、生はその完成に死を加えることで、つまり生を完成しその完全性を授ける死によって豊かにすることで可能となることを証している。

ここには、「ドゥイノ悲歌」は人間についての概念を示しており、それは生と死が根源的に関与していること、人間が自らの根柢にある死から逃れようとすることは誤りであり、寧ろ死こそが人間存在の証明であるという認識が示されている。

「楡の家」から脱出しようとした菜穂子は、そのことを理解せず、生と死という反対物の和解を見出すことができず、今自分の置かれた状況を死に向かうものと捉え、生へ向けて焦慮し結婚を急いだのではないか。ところが、そのように死から逃れることによって獲得された生は果たして真の生たりうるのかという課題に直面することになったのが、その後の菜穂子ではないのか。

このように結婚を急ぐことは真摯な、人間的な生といえるのだろうか。ここで「菜穂子」の創作ノートを援用しておく。結局本文として採用されなかった部分であるから安易な利用は控えねばならないが、人間としての成熟についての堀の捉え方を理解する一助となろう。

いちじく。—菜穂子、主席にて卒業するとだれでも思つてゐたのに英語担当の外人教師との感情の齟齬から、二番に落ちる。…卒業の前日に、受持の教師にいちじくの木かげに呼び出され、はじめてそのことをうちあけられる。そのときの受持教師の態度に頭が上がる。菜穂子をどこまでも一人前の人間として扱ひ、それに訴へる。さういふ中での、菜穂子のいひしれぬ喜び。

菜穂子は無花果の樹下で「人間として」の扱いを受け喜びを感じる。無花果と、大人としての成長が結び付けられている。これはリルケの「ドゥイノ悲歌」にある発想で、Angelloz の Les Élégie de Duino 解説で論じられている。

il ne s'attarde donc pas à fleurir et peut, avec la simple grandeur de ceux qui

surent decider à temps, s'épanouir en figues. ... nous mettons sottement notre gloire à nous épanouir en vaine floraison et, n'ayant pu prendre à temps la décision nécessaire, nous ne réalisons qu'imparfaitement, hâtivement, le fruit qui est notre mission.

(Commentaire de la sixième élégie)

それは遅れることなく花開き、定められたときに決意することの出来る単純な偉大さによって、無花果の実へと成熟する。…我々は軽率にも空虚な開花へと成熟することを誇っており、必要な決意を定められた時にとれず、不完全に、また拙速にしか我々の使命である果実を実現できない。

無花果が定められたときを俟って成熟するのと反対に、人間は軽率に、非本質的な成熟を遂げてしまうという。

菜穂子は人生の問題を早く解決しようと試みて結婚へと急いだ。一人の人間として生きるにはどうあるべきか、どのような生の可能性があるかを熟慮せず、そのような探求そのものを結婚せずにいる故の不安定な心の傾向と決め付けた。現行本文の菜穂子は、リルケの「いちぢく」のようにではなく、拙速な成熟を選択してしまった。

菜穂子は結婚について、人間は「結婚しないでゐるうちは」「幸福なんていふ幻影に囚はれて」おり、「結婚してしまへば、少くともそんな果敢ないものからは自由になれる」と「楡の家」で母に語った。凡庸な夫、閉鎖的な家に埋もれて生きる決意は運命に従う生き方のようにも捉えうるが、それは空虚な成熟に過ぎず、運命から逃げていることになる。菜穂子は母と共にある生活に生の可能性を閉ざすものを感じ取った。平凡な結婚ではあれ、それによって菜穂子は自分なりに新たな生き方を切り開こうとした。しかしそれは菜穂子自身によっても「不安な生から逃れるため」の「格好の避難所」と形容されざるを得ない。

サナトリウムにおいて菜穂子は様々な体験を経、思索をかさねてゆくが、そこでは、不安の根源に横たわる死の問題も本質的にかかわってくることが予想される。

Ⅲ

生の不安から逃れるために菜穂子は結婚という形で自己を安定した枠の中に閉じ込めようとした。しかし、それは必然的に頽落からの呼び戻しを受けずにはいない。結婚生活に「避難所」を求めた菜穂子は、そこにも違和感を覚えるようになる。

> 云ひ知れぬ孤独感に心をしめつけられるやうな気のしてゐたのは、一家団欒のもなか、母や夫たちの傍であつた。
>
> （「菜穂子」　「六」）

そこでは、一人でいるという状況よりも、他者の中にいながら自分が彼等との心の通い合いを構築できないことをはっきり認識させられることのほうがより苦痛とされている。この記述は一読すると菜穂子は他者と人間関係を構築し、それによって孤独を脱したいと思っていたのかと推測させる。しかし、「幸福なんていふ幻想」といった独身時代の発言を踏まえれば、彼女が他者とかかわることに生きる喜び、人間としての価値を求めていたとは考え難い。Robert Pitrou は、

> Il y a dans la solitude de Rilke comme un envers et un endroit ; il y a la *Vereinsamung*, l'esseulement pénible, et *Einsamkeit*, la retraite volontaire, seule condition du recueillement. ... La solitude implique une angoisse féconde, qui nous permet d'atteindre l'essence des choses et le fond de nos propres gouffres.
>
> (Rainer Maria Rilke Les thèmes principaux de son œuvre p.122)

> リルケの孤独には表裏二面がある。「隔離」、辛い孤立状態と、「孤独」、自発的隠遁、内省の唯一の条件とである。…孤独は豊かな苦悩を生み、それによって我々はものの本質、我々自身の深遠の根柢に達することができる。

と述べているが、結婚生活における菜穂子は、他者の中にあって自分の内面との対話も儘ならない。Pitrou のいう「辛い孤立状態」に当てはまろう。

ここで「避難所」という語の持つ意味について確認しておく。パリ時代のリルケを論じた Angelloz によれば、それは決して、人生からの逃避、危機の回避

といった消極的なものではない。

Il fallait trouver le refuge, berceau de l'œuvre nouvelle : … Paul Valéry avait peine à concevoir « une existence si séparé, des hivers éternels dans un tel abus d'intimité avec le silence »

(Rainer Maria Rilke l' évolution spirituelle du poète p.314)

避難所、新たな作品の揺りかごが必要だった。…ポール・ヴァレリーは、「これほど隔絶した存在、静寂とかくも親しんでいる永遠の冬」を思いもよらなかった。

Il ne faut jamais oublier… qu'il est un jeune home inapte à la vie, perdu dans les remous de la grande ville, … Il lui faut decouvrir le refuge où il se trouvera lui-même, où il s'expliquera à lui-même, où il commencera à créer

(同 p.254-p.255)

リルケが生に適応せず、大都会の雑踏の中に迷っていることを忘れてはならない。…リルケには、自分自身を見出し、自分自身を己に説明し、創造を始める避難所が必要であった。

現実に自分が送る生活に違和感を覚え、自分自身の本当の姿に迫るためには、孤独のなかに身を置き、日常の現在を離れることが必要となる。Angelloz の用語における「避難所」は、Pitrou の語彙によれば自分自身の根源に到達する条件となろう。

その意味で、結婚生活が「避難所」というのは誤りであった。が、病を得て入所したサナトリウムはどうだろうか。

此処こそは確かに自分には持つて来いの避難所だ…絶望に自分の心を任せ切つて気のすむまでぢつとしてゐられるやうな場所を求めるための、昨日までの何といふ渇望

(「菜穂子」　「六」)

この絶望は、他者の間にあっての孤立感から逃れた環境で感じているものであるから、自分が孤独であるがゆえの苦しみではなく、結婚以前から抱いた「生の不安」にかかわるものであり、今それに専心しているということが分かる。ただし、この時点で菜穂子が感じている「避難所」は、単に絶望しているに過

ぎず、何ものかを生み出しうる豊かな孤独には達していないことが、次の記述からもはっきりする。

孤独な、屈託のない日々の中で、菜穂子が奇蹟のやうに精神的にも肉体的にもよみ返つて来だしたのは事実だつた。しかし一方、彼女はよみ返ればよみ返るほど、漸くこうして取戻し出した自分自身が、あれほどそれに対して彼女の郷愁を催してゐた以前の自分とは何処か違つたものになつてゐるのを認めない訣には行かなかつた。

(同)

独身時代、菜穂子は「生の不安」に捉えられ、其処から脱しようともがいていた。「何でもできる」といった森のような考え方は、人を迷わせる幻想と考えていた。その一方結婚してみると、サナトリウムで明の訪問を受けた際に「女はつまらない、結婚するとすぐ変つてしまふ」と訴えている。つまり、結婚以前の生には、生の不安は付き纏ったが自分の生きたいように生きることができるという二重性が孕まれていた。生の不安と、生の可能性とは一見相反するが、一体のものであったということができる。自分の望むような生を生きるということは所詮幻想に過ぎない、それは結局北京で客死した森於菟彦のような悲劇的な結末に終わることになるという怖れと、その上でなおもそうした生を希求する思いが錯綜していたのである。

Ⅳ

サナトリウムでの生活は、彼女を死の問題に直面させることになる。ここで死がかかわる二つの挿話を比較する。

(「白いスウェタアを着た青年」が、「許嫁」が「危篤に陥り」ながら「奇蹟のやうに持ち直し」たのを知って「泣きじゃくつてゐるのを見かけ」) 菜穂子はその日から、妙に心の重苦しいやうな日々を送つてゐた。…その若い娘がそれから五六日後の或夜中に突然喀血して死に、その白いスウェタア姿の青年も彼女の知らぬ間に療養所から姿を消してしまつた事を知つたとき、菜穂子は何か自分でも理由の分からずにゐた、又、それを決して分

からうとはしなかつた重苦しいものからの釈放を感ぜずにはゐられなかつた。

（「菜穂子」　「七」）

ここで菜穂子は人間が死すべきものとしてあるという課題を突きつけられ、そこから目を逸らしているようにもみえる。しかし、菜穂子の心を重苦しくしたものが死の問題にあったとすれば寧ろ、その重苦しさは許嫁が危篤から恢復したときではなく、死んだときに感じるはずであろう。この体験からは死について考える機会も得られたはずであったが、菜穂子は許嫁の死によって寧ろ心の解放を感じており、死に向き合った生について思いを致そうとはしていない。この挿話は解釈しづらいのか、後述する西原千博氏を除いて、正面から論じられることが少なかった。

「楡の家」では、先述したように菜穂子は「ロマネスク」なるものに動揺させられるのを避けようとしていた。母の森於菟彦との悲劇的な関係が、そうした人間観に深く関与しているといえよう。愛を土台にした生活を希求することに菜穂子は違和感を持っている。恋人の容態に心を掻き乱される青年の姿は、人のあり方として望ましいものとは菜穂子には映るまい。菜穂子は、他者との人間関係を巡る問題に動揺させられる事態に向き合うことを怖れたのである。

それに対して、菜穂子が肯定的に捉える人間の生き方においては、他者は問題とされない。

若い農林技師は自分がしかけて来た研究を完成して来たいからと云つて医師の忠告もきかずに独断で山を降りて行く…他の患者達に見られない、何か切迫した生気が眉宇に漂つてゐた。彼女はその未知の青年に一種の好意に近いものを感じた。

（「菜穂子」　「九」）

一方この農林技師は、結核という不治の病を抱えて山を降りることは死の危険に直結するにも拘らず、自己のなすべきことに生を賭ける。また、彼は先の青年とは違い、他者との関係に救済を求めている形跡はない。菜穂子はこのような、死に立ち向かい、孤独に困難な生を試みようとする人に関心を向けている。

あの若い農林技師がとうとう自分の病気を不治のものにさせて再び療養所に帰つて来たといふ事を聞いた。…何か決意したところのあるやうなその青年の生き生きした眼ざしが彼を見送つてゐた他の患者達の姿のどれにも立ち勝つて、強く彼女の心を動かした事まで思ひ出すと、彼女は何か他人事でないやうな気がした。

（「菜穂子」　「十五」）

菜穂子は、技師が無謀な試みによって死を決定的なものにしてしまったことよりも、死を覚悟してまでも自己の研究に打ち込もうとすることで得た、生の躍動を重くみている。技師が死を受け入れて自らの求める生を貫いたことに菜穂子は価値を見出し、避難の状態に収まっている自分にとってのひとつの規範と捉えている。菜穂子は農林技師から、生を完成するための死という発想を学び取った。結婚前には避けていた、生の不安、死の問題を直視しようとする姿勢がここに始まる。

この二つの挿話に関して、西原千博氏は、菜穂子が「他人から逃げてきている」自分を自覚し、其処から脱却することの必要性を認識するようになったと論じている[5]。

お前がそんなにお前のまはりから人々を突き退けて大事さうにかかへ込んでゐるおまえ自身がそんなにお前には好いのか。

（「菜穂子」　「七」）

というような記述もある。しかしこの考え方は、農林技師に対し抱いた感情については根拠を欠く。技師が死を決定的なものにしてまで何物かを追窮することが菜穂子の心を揺さぶっており、他者とかかわらねばならないということは特に問題にされていない。療養所で死なねばならないということは寧ろ孤独な最期といえよう。しかし、孤独にあっても真摯な生を求めることこそが本然の生のあり方と菜穂子は考えた。孤独に対して批判的とも取れるこの述懐は、黒川家で他人の間にいて感じた孤独から逃避しようとした嘗ての自己へ向けられたものと考えられる。他者の中にいて感じる孤立を避けても、単に孤独の中に身を置いているだけでは創造的な生に参画することにはならない、という発想を読み取る必要がある。

範となる生き方をする者への評価は、自己の在り方の反省を伴う。しかし菜穂子の行動は遅滞する。それは次に挙げる記述が示すように、不幸なりに安定的な状況に自足してしまっていることが原因といえる。

（明が菜穂子の心に残した痕が）現在の彼女の、不為合せなりに、一先づ落ち着くところに落ち着いてゐるやうな日々を脅かさうとしてゐるのが漠然と感ぜられ出してゐたのだ。…自分の生を最後まで試みようとしてゐる…明

（「菜穂子」　「十八」）

しかし農林技師の場合と違い、明はかつてO村で成長期を共に生きた知人である。明との再会は、人妻であることをいわば弁解として何もせずにいる自分の生き方の虚偽性を告発せずにはおかない。

今の孤独な自分がいかに惨めであるかを切実な問題として考へるやうになつた…明があんなに前途に不安さうな様子をしながら、しかもなほ自分の生のぎりぎりのところまで行つて自分の夢の限界を突き止めて来ようとしてゐるやうな真摯さの前では、どんなに自分のいまの生活はごまかしのおおいものであるか。

（「菜穂子」　「十八」）

明の生も極めて孤独なものだが、菜穂子にとっては真摯な生き方と映っている。孤独であること自体は惨めではなく、孤独にあって如何に生きるかが問題となる。菜穂子は夢を追求すべく何もしていない点で惨めとされる。明と再会するまでも、自らの不安な生、死を前にしての生き方といった課題と向き合っていたが、明の生の試みを見て、考えるだけでなく現実に行動しなければ意味がないと考えるようになる。

こうして遂に菜穂子は行動へと踏み出す。しかしそれは、多くの先行論文が最大の主題として取り組んできたように、夫婦愛によって生の再生が果たされるか否かという問題とかかわるものなのであろうか。

V

菜穂子は、明の訪問を受け、自らの生について反省してから初めて、夫のことを思い起こす。

> 不安さうだつた彼の様子が、急に彼の他のさまざまな姿に立ち代つて、彼女の心の全部を占め出した。彼女はそのうちでひとりでに目をつぶり、その嵐の中でのやうに、少し不気味な思ひ出し笑ひのやうなものを何とはなしに浮べてゐた。…（明が）どんな絶望の思ひをして歩いてゐるだらうと、菜穂子はそんな憑かれたやうな姿を考へれば考へるほど自分も何か人生に対する或決意をうながされながら、その幼馴染の上を心から思ひやつてゐるやうな事もあつた。
>
> （「菜穂子」　「十九」）

ここで菜穂子は、生の規範として、絶望的な思いに拉がれながらも自己の夢を追い求めようとする明の真摯な生き方を思う。「（明のように）どうしてもしたいと思ふことなんぞない」と同じ章の最後に述懐していることからも、圭介を行動の対象にするのは殆ど思いつきに近く、寧ろ生の規範としての明に人間的関心は向けられている。

> 今ならば菜穂子がどんな心の中の辿りにくい道程を彼に聞かせても、何処までも自分だけはそれについて行けさうな気がした
>
> （「菜穂子」　「十七」）

とあるように、困難な生を選択し生を完成しようとする者同士となりうることが明に直観されている。菜穂子の真の理解者は明であり、菜穂子が他者と結びつきうるとすればそれは夫よりむしろ明である。明は孤独に生き、死ぬことを受け入れている。明を肯定的に捉えている以上、菜穂子は自分が孤独であることを不幸であると考えてはいない。

しかしながら明は、菜穂子の人生の同伴者とはなり得ない。

> どうして生きなければならないんだ、こんなに孤独で？こんなに空しくつて？
>
> （「菜穂子」　「二十」）

と明は自問するが、死が予想される中で苦悩することはAngellozによれば

Le chemin de la vraie vie traverse la douleur ; il ne faut pas la gaspiller et désirer sa fin mais la chérir, car seule elle nous restera quand, tout étant mort pour nous, nous entrerons dans une nouvelle saison de notre vie infinie ; mort à la vie, nous vivrons en elle. Où trouver cette demeure? La dixième élégie sera vraiment l'évocation du « sentier » que l'homme doit suivre pour atteindre au réel par la souffrance :

(Les Élégie de Duino　Commentaire de la dixième élégie)

真の生の道は苦しみを経る。苦しみを浪費したりその終わりを望んだりせず、それを大切にしなければならない。我々にとってはすべてが死んでいるとしても、我々が無限の生の新たな季節へと入るとき、苦しみだけが残っているであろうから。生に向けて死に、我々は死の中に生きるであろう。第十悲歌はまさに、人間が苦悩によって現実に到達するために我々が辿らねばならぬ隘路を喚起するものである。

というように、無限の生へ到達するために必要な手続きとみなされる。このことは堀自身、この論を意訳している。

本当の人生への道は悲しみを過ぎりながら通つてゐる。その悲しみを浪費したり、その果てるのを欲したりしてはならない。そしてそれを大事にしなくてはならない。何故なら、すべてのものが死んで、我々が無限の生の新しい季節に入つてゆくとき、我々に残されるのはその悲しみだけだからである。

(「心の仕事を　或未知の友への手紙」　初出不明　文末に(一九四一年八月　軽井沢にて)とある　角川書店「小品集・薔薇」所収)

死すべきものとしての人間にとって、その苦悩こそが生の証明となり、この苦悩を経て人間は新たな生へと参画する。明の苦悩は、新たな生へと入ってゆこうとする者にとって必要な過程である。こうした苦悩とその結果としての新たな生は、Angellozによってより具体的に示されている。

La vie humaine n'est qu'un accident passager, qui arrête un instant l'evolution nécessaire, et les mourants soupçonnent qu'elle est un simple intermède, une danse

vaine...Nous savons maintenant que la chaîne des hommes passe du germe vivant à l'épanouissement puis à l'anéantissement dans l'hiver ; chacune des existences humaines est comparable à une des années de l'infini du temps ; acceptons le rythme de ce flux vital et acceptons la mort

(Les Élégie de Duino　Commentaire de la quatrième élégie)

人生は束の間の偶然の出来事に過ぎず、あるときに必要な展開をやめてしまう。死にゆく者は、人生は単なる幕間、むなしい踊りではないかと疑う。…我々は今や、人間の鎖は生の種子を開花へ、それから冬における死へと伝えてゆくことを知る。人間存在のそれぞれは、無限の時の中の一年に似通っている。生命の流動のリズムを受け入れよう、死を受け入れよう

死を前に、人間は人生の無意義さに思いを致す。しかしながら、死を受容することで、生命は無限の流動の中に入り、種子が花開き、散ることで、新たな命に引き継がれるという。この発想を明も受け継いでいる。

（医者を）固辞して、明はただ自分に残された力だけで病苦と闘つてゐた。…雪煙がさあつと上がつて、それが風と共にひとしきり冷い炎のやうに走りまはつた。…おれの一生はあの冷たい炎のやうなものだ。—おれの過ぎて来た跡には、一すぢ何かが残つてゐるだらう。

（「菜穂子」　「二十一」）

明は、自分の生は夢を達成することなく終焉を迎えることを悟るが、生命は流動し、別のものへと引き継がれてゆくと考えている。治療を拒んだことについては、Angelloz が紹介する

Si douloureuse que soit cette fin, elle était celle que Rilke aurait pu choisir pour mourir sa propre mort. ... pour mourir sa propre mort, il renonça héroïquement à tous les médicaments et aux piqûres qui auraient pu diminuer sa souffrance.

(Rainer Maria Rilke l' évolution spirituelle du poète p.359)

その最期が如何に苦痛に満ちたものであれ、これが自分自身の死を死ぬためにリルケの選びえたものであった。…自分自身の死を死ぬため、リルケは気高くも、苦痛を和らげる如何なる治療も注射も拒んだ。

というリルケの最期のように、生を完成するための必要な手続きとして、自分

自身の死を死ぬことを彼は選んだといえる。彼はリルケのような、自分自身の死を死に、その生を完全なるものにしようとしたのである。

彼の生き方は、彼の死によつて、一層完成す。夭折者の運命。

（菜穂子ノート）

と明は構想された。この設定の背景には Angelloz の

S'il proclame heureux celui qui mourut jeune, c'est qu'il voit dans cette separation le prélude d'une renasissance à un ordre de vie plus élevé

（Rainer Maria Rilke l' évolution spirituelle du poète p.335）

リルケが夭折者を幸福としたのは、この離別に、より高い生の秩序への再生の序曲を見るからである。

という記述があろう。若くして死ぬことが予想される明は、リルケのいう夭折者たる資格がある。そして、「より高い生の秩序への再生」は、菜穂子によって実現を期せられると考えられる。そこで明の役割は終了するといえよう。

一方、菜穂子は圭介について、彼が妻としての自分に近づこうとしていることよりも、「生の不安」を彼も感じ取ったらしいことに関心を抱いている。菜穂子にとって重要なのは「生の不安」と如何に向き合うかという問題なのだ。既に論じたとおり、菜穂子にとって他者と共に生きることはさして切実に必要なことではない。圭介との間に夫婦愛を築きたいと考えたとみなすことはできない。

突然上京して夫に働きかけた後、菜穂子は自分の突飛な行動の動機について振り返る。

彼女はあのとき心の底では、思ひ切つて自分自身を何物かにすつかり投げ出す決心をしたのだ。それが何物であるかは一切分からなかつたけれど、

（「菜穂子」　「二十三」）

ここで、「誰か」「何者か」ではなく「何物か」とあることに注意が求められる。自己を投げ出す対象は人ではない。それは農林技師の場合は自分の研究、明であれば孤独な旅を通しての本来の自己の探求であり、他者との関係には限定されない。菜穂子が心を揺さぶられた青年技師の生き方は、自分のすべきことへ「自分を」「投げ出す」ことであって、孤独でなくなることではない。夫の

追及に対しても「自分のしたいことがどうしてもしたくなつた」と答えつつ、そのような生を貫徹した都築明の姿を思う。菜穂子が第一義的に求めているのは、閉ざされた環境のなかに無為に閉じこもっているだけの状況の打破であり、他者との人間関係の構築であるとするのは飛躍である。

この明を思い浮かべる場面には、初稿と刊本とに語句の微細だが決定的な差異がある。

（夫に突然の上京の意図を問われて）ふと此の頃何かと気になつてならない孤独さうな都築明の姿を思ひ浮べた。

（「菜穂子」　「二十四」）

これは初出では

ふと此の頃何かと気になつてならない淋しさうな都築明の姿を思ひ浮べた。

となっていた。前者の表現では人との関係を求める姿勢が窺われるが、改訂されたことで孤独であることを菜穂子の眼から見て明は消極的に捉えないことになる。そのような明を想起することは、菜穂子もまた孤独であることを受け入れようという思念を抱いていると考えられる。

ところで、与えられた運命に対しどう向き合うかという問題について、リルケの理念を Pitrou は次のように解説している。

(Comment alors vivre... ?) cette obsession, Malte, lui, n'a pas réussi à la vaincre. Il a résolu le problème à contre-sens. Ici encore, la solution, c'est le consentement

(Rainer Maria Rilke Les thèmes principaux de son œuvre p.103)

（如何に生きるかという問題について）この強迫観念をマルテは克服することができなかった。彼はそれを反対方向に解決した。その解答は、同意することである。

「同意」する対象として Angelloz は「苦悩」という負の条件をはっきり示している。

l'homme est fait pour s'élever par sa souffrance à un stade supérieur ; son existence terrestre ne représente qu'un stade dans l'evolution qui le conduit depuis

une origine mystérieuse jusqu'à un epanouissement total ; la clef qui ouvre les portes successives, c'est la souffrance, acceptée, consentie

(Rainer Maria Rilke l'évolution spirituelle du poète p.339)

人間は苦悩によってより高い段階へと上るように作られている。その地上での存在は、人を神秘的な始原から全面的な開花へと導く発展における一段階に過ぎない。次なる門を開く鍵は、受け入れられ、同意された苦悩である。

自らの苦しい運命から脱しようとするのではなく、其処で課せられる経験を受け入れることで、人間存在のより高次な在り方へと発展してゆくことができるという思想が表明されている。

彼女はそれを機会に、今夜この小さなホテル—さつきから外人が二三人ちらつと姿を見せたきりだつた—に一人きりで過さなければならないのだと云ふ事をはじめて考へ出した。しかしこの事は彼女に佗しいとか、悔しいとか、さう云ふやうな感情を生じさせる暇は殆どなかつた。一つの想念が急に彼女の心に拡がり出してゐたからだつた。それは自分がけふのやうに何物かに魅せられたやうに夢中になつて何か手あたりばつたりの事をしつづけてゐるうちに、一つ所にじつとしたきりでは到底考へ及ばないやうな幾つかの人生の断面が自分の前に突然現はれたり消えたりしながら、何か自分に新しい人生の道をそれとなく指し示してゐて呉れるやうに思はれて来た事だつた。

(「菜穂子」　「二十四」)

最終章のこの記述には、「一人きり」であることを否定的に捉える姿勢は見られない。問題は孤独であるか否かにはなく、新たな可能性に自己を投げ出すことにある。

ni révolte, ni évasion hors de notre entourage, mais bien plutôt consentement « dans un nouvel esprit de conciliation », à « ce qui est donné, ce qu'on attend de nous, le cas échéant, à ce qui s'impose » ; une sorte de « descente en profondeur, et qui cherche non pas tant à résister à la pression des circonstances qu'à utiliser cette pression, afin de parvenir grâce à elle à une couche plus dense, plus profonde, plus

particulière de notre propre nature »

(Rainer Maria Rilke Les thèmes principaux de son œuvre p.106-107)

我々を取り巻くものへの反逆やその外への逃走ではなく、「和解という新たな精神」への、「与えられたもの、我々が求められるもの、万一のとき担わされるもの」への同意。ある種の「深淵への下降、状況が押し付けてくるものへの抵抗よりもその圧力を利用し、それによってより濃密で深い我々の本性に固有の層に達する」こと。

une lettre à la baronne Schenk von Schweinsberg anticipe l'Elégie future : « Pourquoi faut-il que les êtres qui s'aiment, se séparent avant qu'il soit necessaire?... Parce qu'au fond, existe en chacun,...la certitude étrange que tout ce qui dépasse une belle médiocrité, essentiellement incapable de progrès, devra, au fond, être accepté, subi et vaincu dans la plus complète solitude, comme par quelqu'un d'infiniment isolé(quasiment unique). Si paradoxal que cela semble, on ne peut aimer que solitaire. »

(Rainer Maria Rilke Les thèmes principaux de son œuvre p.129)

シュヴァインスベルグ男爵への書簡が、未来の「悲歌」を先取りしている。「なぜ愛し合う者たちは、愛が必要となる前に別れてゆくのか。…根源的には各自の中に、…本質的に発展することのできない凡庸な幸福を超越する者は完全な孤独の中で受け容れられ、耐え忍び克服しなければならないという確かな事実が存在するからだ。如何に逆説的に思われようとも、人は孤独な生活をしか愛することが出来ない。」

Angelloz のリルケ論にみられるこうした、自分に与えられた生の条件から逃げることをやめ、それを受け入れた上で単独者として如何に生きるべきかを考えるという発想は、菜穂子の到達した思念にも通底していよう。夫との夫婦愛の成立は、彼女の生にとって必須の条件ではもはやない。菜穂子は、「一人きり」で投げ出された（geworfen）世界に、単独者として自己を投企し（entwerfen）、生きてゆくであろう。

[1] 「流動するテクスト」（二〇〇八年十一月　翰林書房）
[2] それぞれ日本語にすれば「リルケ　詩人の精神的展開」、「ドゥイノ悲歌」、「リルケ　作品の主題」
[3] 「「かげろふの日記」論―リルケ受容からの逸脱―」（国語国文　二〇〇八年三月）
[4] 「堀辰雄「菜穂子」の成立試論」（横浜国大国語研究　一九九二年）
[5] 西原千博「堀辰雄試解」（二〇〇〇年十月　蒼丘書房）